平成２６年度　群馬県中学校校長会　第２回中学校生徒指導部会

会　場：群馬県生涯学習センター

日　時：平成２６年６月２７日（金）　１３：３０～

講　演　「 急速に変化する子どもたちのネット環境　―LINEによるトラブル―　」

ぐんま子どもセーフネット活動委員会　委員長　飯塚　秀伯　先生

１　はじめに

先生方は、インターネットに関わっての生徒の変化と日常的に向き合い、そこから発生するトラブルに対応しなければならないことが多々あることでしょう、本日は、最近の子どもたちを取り巻くネット事情について一緒に考え、今後の子どもたちに留意しなければならないことを話し合っていきましょう。

２　インターネット事情

今の中・高校生は、デジタルネイティブといわれ、生まれた時からインターネットがある環境にいます。しかも、インターネットは、ますます進化しています。現在の３～４才の幼児にとって、どんなネット環境かを確認するエピソードを２つ紹介します。

ひとつは、家族がもっているタブレットで遊んでいる幼児の事例です。この幼児に雑誌を渡すと、ページをめくろうとして指でスクロールしようとするのです。しかし、画面が変わらないので「壊れている」と思い込んでいるのです。もうひとつは、「おにからの電話」というアプリです。皆さんは聞いたことがあるでしょうか。若いお母さん方に流行っているそうです。駄々をこねて言うことを聞かない幼児に、自分の代わりにスマホを使って「おにからの電話」で叱ってもらうというものです。良いも悪いも、現在はこのような社会状況になっているのです。さすがの高校生でも、これらの映像を見せると、「私たちもデジタルネイティブと呼ばれているが、もっとすごい状況になっている」ことに、びっくりしてショックを受けていました。ちょっと安心しました。

３　インターネット上でのコミュニケーション

インターネット上でのコミュニケーションは、主に文字や絵文字です。この点を十分に認識していく必要があります。例えば、健康な体育教師が車の運転をするならば、安心ですよね。いたずらっ子だったらどうでしょうか。怖く感じるでしょう。さらに、イライラしている大人ではどうでしょうか。車が凶器に感じてしまうのではないでしょうか。また、コックさんが包丁を持ったら、おいしい料理をつくってくれそうな感じですね。でも、子どもがもったら、振り回して自らも傷つけてしまうような感じを抱くでしょう。イライラした人が持つと、こんなに怖いことはないでしょうね。

このように同じ車や包丁であっても、運転する人、包丁を持つ人によって、全然違ってきます。同じものなのに、便利なものにもなり、非常に怖いものにもなります。このことは、スマートホンでも同じではないでしょうか。使う人によって全然違ってくるのです。有効なコミュニケーシ

ョンの機器にもなるし、大きなトラブルのもとにもなります。

４　LINEというアプリケーション

（１）中・高生が利用している SNS

LINE は、グループが基本です。たとえば、クラスの友達４人グループ、部活での友達５人グループ、あるいは、小学校からの仲の良い友達６人グループなど、ひとりの子が複数のグループをもっています。私の大学生の娘は、１２くらいのグループをもっているとのことでした。グループ内で情報を共有できるので、とても便利に使っているそうです。逆にとらえるならば、情報を共有してしまうことで、トラブル発生の火種となってしまう危惧があるということです。

高校生に現在多く使っている SNS をアンケートしたところ、男女とも LINE、Youtube（動画）、ツイッターが圧倒的に多かったです。男子では、パズドラというゲームサイトも多かったです。アンケート結果では男女とも少なかったですが、今後、ツイキャスというアプリに注意していく必要があると考えます。ツイキャスというのは、動画を生放送するアプリです。生放送の動画を見た人が文字を書き込むことで話しかけ、発信者が生放送でそれに答えていくというものです。無料で順番待ちをせずに利用することが可能なので、発信のハードルが低いです。小学生までも利用しています。今のところツイキャスがらみの事件については聞いていませんが、発信者は見てほしいので、露出を多くする傾向があります。大きな心配事です。

（２）LINE によるコミュニケーション

グループでの会話は、自分→友達→友達→自分→友達→友達→友達・・・というようにして、会話が弾んでいきます。その会話文の前に「既読」マークがあります。既読マークとは、相手が読んだという「しるし」です。普通のメールですと、返事がくるまでは相手が読んだかどうかは分かりません。LINE では「既読」マークが表示されるので、相手が読んだことがすぐに確認できる点で便利です。また、スタンプとよばれるものが、これまでのアプリに比べて大きく、いろいろな種類があり表現力が豊かとなっています。女子高校生などの気持ちをグッと引き寄せる一因となりました。そのほかにも、写真とか地図とかを簡単に添付することもできます。１００円～１７０円程度の有料のスタンプもあります。スタンプだけで、お話ができるというような機能もあります。

LINE のコミュニケーションは、グループでお話をやりとりするので、ものすごいスピード感があり、滝のように会話が流れます。これまでも、５分間ルール・３分間ルールとかがあり、早く返事をしないと友達でも何でもないというようなトラブルになったことがありました。しかし、今では、１０秒ルールとか３秒ルールというような言い方があるくらい、非常にテンポが速くなってきました。テンポが速いと言うことは、文字で送られてきたものを感覚で返事を打つことになります。このことは、よく考えないで送信してしまうことにつながります。そうすると、いつの間にか予想外な展開になってしまうことが少なからずあります。いつの間に、特定の子に対する悪口大会になっていることがあります。修正しようと思っても、あまりも速く会話が進んでいくので修正できず、悪口がどんどんエスカレートして大きなトラブルに発展してしまうことになります。

私たちは、どんな情報をもとにコミュニケーションをしているのでしょうか。「直接」会ってのコミュニケーションの場合は、表情・目配せ・ジェスチャー、声の高さ・語調、言葉・間合いなどから、多くの情報を引き出し総合的に判断してコミュニケーションをとっています。「電話」によるコミュニケーションでも、「直接」より情報は少なくなりますが、それでも、声の高さ・語調、言葉・間合いなどにより、相手の気持ちなどをある程度判断し、コミュニケーションを交わすことができます。しかし、「メール」によるコミニュケ-ションとなると、情報は言葉（文字）と絵文字だけであり、情報量が極端に少ないため、意図が正確に伝わらず間違いが起こることが当然といってよいでしょう。

ですから、メールなどの文字によるコミュニケーションの特徴を知り、おかしくなりそうになったら一度立ち止まり、全体のスピードを落としてあげることで、考える時間を確保することが重要です。当たり前のことですが、なによりも文字だけに頼らず、直接会って話すことを大切にしていかなければなりません。複数の仲間のやりとりのなかで、「会って話そう」的な発言をすることはとても勇気のいることですが、そのような力強い発言をできる人が出てくるようにしていかなければならないと強く感じています。

（３）LINE と生活習慣

LINE は、グループが基本ですので、求心力が大変強いです。その弊害として、既読のプレッシャーというものがあります。大学生の半数近くが「LINE の既読はつらい」とつぶやいています。高校生でも、約３割程度がストレスを感じていることが分かりました。自分が参加していないことが分かると、あとあと「まずい」という意識が強く働くようです。仲間はずれになりたくないという心理になります。また、自分の悪口を言ってないかどうか気になります。そこで、やり続けざるをえない状況に追い込まれていきます。

ある中学校の教頭先生が、昨年の春のまだ中学生に LINE が広まっているかどうかよく分かっていない頃、職員室での先生方の会話の中で、「どうも最近、生徒の様子がおかしいのよね。」と耳にしたそうです。「忘れ物をしたことがない子が忘れ物をしてくる。宿題を忘れたことがない子が宿題を忘れる。」ということでした。どういうことだろうとその子に聞いてみたところ、原因は、LINE だったと言うことです。睡眠時間を削ってまでの LINE の長時間利用が明らかになったと言うことです。

５　ネットに発信する上で心がけるべきこと

高校生が発明した「ネガポジテン」というものを紹介します。これは、ネガティブな言い方をポジティブな言い方に変換して発信するというものです。今の子どもたちはそれなりの情報モラルを学んでいるので、ツイッターで個人名を挙げて攻撃することは以前に比べるとずいぶん少なくなってきました。それでもネガティブな言葉を発信しがちです。例えば、「あいつ、顔も見たくない。」「このカフェは感じが悪い。絶対にもう来ない。」程度のことはいってしまいます。それを見た友達も、いやな気持ちになってその子から離れていく、あるいは、その子の発信を見なくなるようになってくる。これでは、コミュニケーションのあり方としてまずいと言うことで、高校生が発明したのが「ネガポジテン」です。ネガティブ的言い方の「あいつ、顔も見たくない」「このカフェは感じが悪い。絶対にもう来ない。」をポジティブ的言い方の「自分がされていやなことはしない。当たり前だけど。」「笑顔大事だよね。笑う角には福来たる。」にみたいに変換していこうというものです。ネットの世界も公共の場であり、「思いやりの気持ちを大盛りに」が大切だと考えます。

本当に怒っているときなど、ネットに書き込みたい衝動にかられる人もいるでしょうが、ネッ

トに書き込むとろくなことは起こりません。怒っている時って、判断能力がないときです。本当に怒っているときは、ネットから離れることを子どもたちに教えていかなければなりません。ある人望のある著名人が、半年ほど前にあるイタリアンレストランに入り、非常に不快な思いをしたそうです。そのことを店名が分かってしまうような書き込みをツイッターでしてしまった結果、日本中からバッシングを受けたという実例があります。

６　インターネットを使っての子どもの遊びの変化

ｉモードと呼ばれた携帯電話にインターネットが付いたのは、１９９９年でした。インターネットが付いて、あっという間に女の子に広がりました。ただ、この時は使っただけお金がかかりました。当時の高校生は、お金がかかるので用意周到に準備して、ほしい画像等が取り終わったならすぐに切るように工夫してインターネットとつきあっていました。２００４～５年にかけて、パケット料金（使い放題プラン）となりました。当時の料金は月８，０００円程度で結構高かったのですが、親からすれば、突然数万円の請求書が届くよりも安心だという意識が働いたようです。高校生のあいだに、パケット料金が急速に広がりました。これを機に、子どもたちの使い方が激変しました。お金がかかると言うことでインターネットの使い方が限定的だったのが、興味あるところに次々とつなぎぱっなしという状態になっていきました。出会い系サイト、アダルトサイトまで見放題というような様態になり、パケット料金は、巨悪の根源とまでいわれました。２０１０年スマートホンと LINE が一緒に出現し、また子どもたちのネット環境に大きな変化をもたらしました。

この変化の流れをサイトで表現すると、最初は子どもたちは学校裏サイトなどで遊んでいました。しばらくすると、プログが出てきました。６０～１２０項目ぐらいの質問に対して回答ができ、名刺代わりに自分をアピールできるものです。大きく流行りました。この頃から、ネットパトロールなどの必要性が求められました。裏を返せば、これらは、誰でも閲覧することができたので、まだネットパトロールがしやすい時代でした。このあたりで、パケット料金となり、ゲームサイト（モバゲー、グリーなど）が出てきました。モバゲーやグリーは、表面上はゲームサイトですが、コミュニティー機能が付いています。入り口はゲームサイトで、中はコミュニティーサイトといえます。しかも、鍵がかかります。このへんから、見守り（パトロール）がしづらくなってきました。それから、ブログ、ツイッター、ユーチューブなどがあらわれ、子どもが遊ぶ範囲が大きく広がりました。それは、大人が気を付けなければならない範囲が大きく広がってしまったということです。しかも、鍵がかかっていて、中に入り込むことができません。子どもが何をしているのか、大人には分からない状況になってきてしまいました。密室の中でいろいろなことがやりとりされているという現状です。

有害（ブラック）サイト（出会い系サイト、薬物販売サイト、アダルトサイトなど）は、フィルターリングでブロックすることができます。しかし、スマートホンや LINE の時代になって、事態は一変してきました。発信のしやすさがプラスされ、「バカッター、セクスティング、リベンジポルノ、コミュニケーションのトラブル」などは、フィルターリングでは守れきれません。「子ども自身が発信に気を付ける。」というような、ネット社会に生きる力強さを持たせていかなければなりません。発信がより簡単に、よりスピーディーに、しかも手元でできるということが今

の子どもたちのネット環境なのです。

７　拡散し続ける情報、完全な匿名性が保てるわけでない

バカッターとよばれるサイトに、アルバイト先の冷蔵庫に横たわっている写真、ピザの生地を顔面に貼り付けている写真、男子高校生がお酒を飲んでいる写真などがアップされました。これらは自撮りといって自分でとって、自分で発信しているのです。この子たちはみんなちょっとしたいたずらの気持ちで、気軽に、後先のことを考えずにアップしてしまっているのです。この結果どうなったでしょうか。これらの会社は、ホームページに謝罪文を掲載し続けています。なかには、閉店に追い込まれたお店まであります。飲酒した男子高校生の場合は、いろいろな書き込みから高校名がわかり、該当生徒は停学などの処分となったようです。このような事案が立て続けに６件あったそうです。なかには、本当はウーロン茶なのに、自分でお酒と書いてアップしてしまったところ、お酒という言葉があっという間に広がり、どうにもならなくなってしまったというのもありました。

ある有名ホテルでの事件ですが、従業員が「今日〇〇のタレントが来た。すげぇーえらそうで、しかも女連れ、チョーうざい」とツイッターでつぶやきました。そうしましたら、この従業員の実名が４時間であばかれネット上に広がってしまいました。今でも、この子の名前で検索をかけると、ヒットしてしまいます。今もなかなか社会復帰ができないでいるそうです。

なぜ、実名が分かってしまうか、それは、「あなたの振る舞いを見つけ出す人がいる」という事実です。インターネットは非常に開かれていますので、いろいろな人がいます。ある意味偏った価値観に基づく正義感を振りかざした人がネットにはたくさんいるのです。具体的には、２ちゃんねラーとよばれる人たちです。

お話した事例ですが、ネットの仲間（友達）だけに発信しているつもりなんですが、その友達がコピーして別の友達に発信してしまっているのです。悪気はないのです。コピーも非常に簡単です。一つボタンを押すと発信できてしまうのです。友達の友達は、友達ではありませんので、どんどん拡散していきます。そうすると、様々な断片から個人の特定にいたります。今の子どもたちは、複数のサイトに登録しています。一つのサイトに、自分の個人情報を多くさらけだす子は、さすがに今は少なくなりました。しかし、あるサイトには、〇〇市在住、こっちのサイトには中２、違うサイトには〇〇部所属など、様々なサイトに、個人が特定できるキーワードをちょっとずつ貼り付けてありがちです。あるいは、友達の方が「〇〇ちゃんの写真」というように個人情報を流してしまうこともあります。このような様々な断片から、個人が特定されてしまうのです。

７　被害者にも加害者にもなる

児童・生徒には、事例に基づき罪名をいうなどの具体的なことを説明すると、かなり意識するという傾向があります。例えば、「Ａは馬鹿じゃないの」「Ａはマジきもい」は侮辱罪、「Ａは先週万引きして捕まってやんの」は名誉毀損罪となります。事実であっても、自分と関係ない犯罪のことをいうと名誉毀損罪になるそうです。あるいは、「昨日、コンビニで万引きしたのを見た。ネットでばらしてやるぞ。５，０００円でだまっててやる。」は恐喝罪になります。「〇〇先生を困らせるために今から××で自殺します。さよなら。」なんて冗談半分でも書くと、偽計業務妨害罪となります。「こういうことをすると、こうなる。」と具体的に伝えると、非常に意識してくれるようです。

女の子が被害にあった典型的な例を３つ紹介します。１つ目は、男が女の子になりすまして、「Ａ子さんはどんな下着なの？友情の証に私の下着姿の写真を送るから、Ａ子さんの下着姿も写メイで送って。女の子同士だからいいでしょう。」というものです。２つ目は、「もう３ヶ月もつ

きあっているのだから、裸の写真をくれ。」というものです。彼氏が怒ってしまったら大変なので送ってしまうことが多いようです。当然ながら二人の良好な関係が長く続くとは限りません。半年後、１年後に別れた時に、写真をばらまかれてしまうこともあります。そうすると、その写真はリベンジポルノと呼ばれる範疇の一つになってしまいます。リベンジポルノが、アメリカでは社会問題化しています。３つ目は、テレビ関係者と名乗って、「裸の写真をくれたら、アイドルの〇〇に会わせてやる。」というものです。裸の写真を送ってしまうと、「裸の写真を学校や親にばらまかれたくなければ、俺の言うことを聞け。」と脅され、わいせつ被害にあう可能性が非常に高いです。

このような安易な発信が被害に遭う可能性が高いという事実を、どの段階で女の子に伝えるべきでしょうか。私は、中学生段階で必要だと考えています。さらには、小学校５・６年生でもこのような教育を行っていく必要があるのではと思い始めています。確かに、性的な生々しい表現などもありますが、ことが起こってからでは遅いわけで、できるだけ早い段階から被害にあわないように教え伝えていくことが重要と考えます。児童ポルノ被害で圧倒的に多いのは自画撮りで、約４割をしめます。これをくい止めれば、約４割の被害を減らすことができるのです。

９　過去の書き込みが未来に影響

さきほど、「冷蔵庫に入る」「飲酒」「ホテルの従業員」などの事例を取り上げましたが、その時も、当然、社会的制裁や法的裁きを受けますが、それで終わりではないのです。将来にわたって蝕む可能性があります。就職に関わって、人事担当者は就職希望者の名を検索するともいれています。若いときに何気なしに発信してしまった過去のものが検索され出てくると、大変な不利益になってしまう場合があります。また、結婚でも、相手方を検索してイメージと違う写真などが出てきてしまうこともあります。実際に、婚約破棄にまでいたった例があります。

ある小学校でのパソコンを使った授業で、「身近な人である親を検索してみよう」ということになりました。私は、その授業を見てどきっとしました。１０年後に、自分の子どもが親の名前を検索して耐えられるかどうかと思い至ったからです。私たちの世代では、若い頃の書き込みの蓄積はありませんが、今の中・高生には、いろいろな書き込みの蓄積があります。自分の子どもが小学生、中学生になって、親の名前を検索した時に耐えうるかどうかという問題が発生してくるでしょう。中・高校生に書き込みなどをする時は、このような点も考えてからにしてほしいと願っています。高校生に自分の過去の発信が心配かどうかをアンケート調査したところ、男子２３％、女子３８％が、「ちょっと心配」と答えています。具体的には、「自分の写真」と答えた生徒が多かったです。

過去に発信したものは、デジタルなのでいつまでも消えません。このことから、「デジタルタトゥー」と最近いわれています。永遠に残ってしまう入れ墨たいなものだということです。インターネット社会以前でしたら、環境を変えたり時間の経過とともに再出発する余地もありました。しかし、デジタルタトゥーの時代になりまして、過去の発信などを白紙に戻すことができませんので、再出発することが大変難しくなりました。そんな怖い世の中になってきたのです。

10　おわりに

インターネットは、公共の場であり、誰が見ているか分かりません。しかも、その言葉や写真などは永遠に残ってしまう可能性があります。公共の場であるという認識を持って、思いやりのある言葉や丁寧な言葉、人権に配慮した言葉が必要です。人としての常識ある振る舞いがインターネットだからこそ必要なのです。

インターネットは完全な匿名ではあり得ません。必ず足跡は残り、足跡をたどれば必ずあなたにたどり着くのです。中・高校生になると、インターネット上にいろいろと発信するようになるでしょうが、その時に「この情報を発信していいのだろうか」と迷うこともたくさんあると思います。そのような時、日常生活でやらないことはインターネット上でもやらないことを判断材料としてほしいと強く願います。インターネットの中で「目立ちたい」という発想は大変危険です。

愛知県刈谷市では、「小・中学生には、夜９時以降はインターネットを使わせない」取組を地域ぐるみで行うことが報道されました。すてきな取組だと思います。刈谷市の取組について高校生に聞いたところ、女子の５１％が「必要だと思う」と答えました。おそらく自分自身の小・中学生時代のインターネットとの関わりを振り返っての自省が込められた数値ではないかと解釈しています。群馬県の各市町村でも刈谷市のような取組ができるかどうかは分かりませんが、推進を後押ししてくれるデーターではないかと思います。

最後になりますが、子どもたちに、『インターネットルール　～守るあなたが守られる～』ことを肝に銘じ、かしこいインターネットの使い手になってくださいと伝えたいです。ご清聴ありがとうございました。